

2015.12.17

Hiroshi Michiwaki

道脇 裕

### 一般逆数とゼロ除算

逆数を自然な形で拡張し、ゼロ除算の概念を取り込んで成立する、逆数の一般化を図ることを考えることにしよう。

定義 2つの実数  $\alpha$ ,  $\beta$  についての分数  $\alpha/\beta$  の逆数  $(\alpha/\beta)^{-1}$  とは、

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 \frac{\beta}{\alpha}$$

で定義されるものとする。ただし、

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 = \begin{cases} 0 & (\alpha = 0 \vee \beta = 0) \\ 1 & (\alpha \neq 0 \wedge \beta \neq 0) \end{cases}$$

である。

定義により、或る数  $\alpha$ , 或る数  $\beta$  について、

$$\frac{\alpha}{\beta} = \gamma \quad (1)$$

とすると、その逆数は、

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \gamma^{-1} \quad (2)$$

であるから、 $\alpha=\beta$  の場合、(1)式は、

$$\frac{\alpha}{\alpha} = \gamma \quad (3)$$

であって、(2)式は、

$$\left(\frac{\alpha}{\alpha}\right)^{-1} = \gamma^{-1} \quad (4)$$

であり、定義から

$$\gamma = \frac{\alpha}{\alpha} = \left(\frac{\alpha}{\alpha}\right)^{-1} = \gamma^{-1} \quad (5)$$

を得る。ゆえに、

$$\gamma = \gamma^{-1} \quad (\alpha = \beta) \quad (6)$$

が成り立つ。この  $\gamma$  の値は、 $\alpha=\beta$  の値によって次の二値をとり得て、

$$0 = 0^{-1} \quad (\alpha = \beta = 0) \quad (7)$$

$$1 = 1^{-1} \quad (\alpha \neq 0 \wedge \alpha = \beta) \quad (8)$$

となる. なお, (7)式は, 0 の逆数, 即ち  $0^{-1}$  は,  $1/0$  ではなく, 0 に限ることを意味している. また,  $\alpha\beta = (\alpha\beta)^1$  並びに  $\gamma = \gamma^1$  を勘案して, (1)式と(2)式の辺々の積をとると,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^1 \times \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \gamma^1 \times \gamma^{-1} \quad (9)$$

であるから(9)式左辺の指数算を行うと,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^1 \times \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{1-1} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 \quad (10)$$

であるから,

$$\frac{\alpha}{\beta} \times \frac{\beta}{\alpha} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 \quad (11)$$

または,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 \frac{\beta}{\alpha} \quad (12)$$

を得る. この(11), (12)式は, 正に, 逆数のより厳密な定義式であり, 逆数の自然な拡張になっていると言ってよい. つまり, (11)式及び(12)式は一般逆数の定義式であると言える.

従って, 或る数  $\alpha$  と或る数  $\beta$  について,  $\alpha\beta$  の逆数, 即ち  $(\alpha\beta)^{-1}$  は, (12)式を満たし, 従って,  $\alpha$  又は  $\beta$  の少なくとも何れか一方が 0 のとき, ゼロ除算の基本定理  $a/0=0$ , 並びに, ゼロ乗の基本定理  $0^0=0$  から,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 = \left(\frac{0}{\beta}\right)^0 = 0^0 = 0 \quad (13)$$

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 = \left(\frac{\alpha}{0}\right)^0 = 0^0 = 0 \quad (14)$$

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 = \left(\frac{0}{0}\right)^0 = 0^0 = 0 \quad (15)$$

を得, その逆数は 0 に限られることを示している. なお, (14)式の関係は,  $a \neq 0$  のとき, 代数学的には,

$$\frac{a}{0} = \frac{a}{0} \cdot 1 = \frac{a}{0} \cdot \frac{b}{b} = \frac{a \times b}{0 \times b} = \frac{b \times a}{0} = b \cdot \frac{a}{0} \quad (b \neq 0, 1) \quad (16)$$

これより,

$$\frac{a}{0} = \frac{0}{b-1} = 0 \quad (17)$$

を得, ゆえに,

$$\frac{a}{0} = 0 \quad (18)$$

が成り立つ (ただし, 分数と除算の相異点には注意が必要である.). 従って,  $\alpha$  又は  $\beta$  の少

なくとも何れか一方が 0 のときの逆数は,

$$\left(\frac{0}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{0}{\beta}\right)^0 \frac{\beta}{0} = 0 \cdot 0 = 0 \quad (19)$$

$$\left(\frac{\alpha}{0}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{0}\right)^0 \frac{0}{\alpha} = 0 \cdot 0 = 0 \quad (20)$$

$$\left(\frac{0}{0}\right)^{-1} = \left(\frac{0}{0}\right)^0 \frac{0}{0} = 0 \cdot 0 = 0 \quad (21)$$

となる. これら結果からは,  $0^{-1}=0$  が一意的に成り立つと言える. このことは, (19), (20), (21)式の何れも, 最右辺と最左辺を入れ換えた両辺の逆数をとった際に, それぞれ,

$$0^{-1} = \left(\left(\frac{0}{\beta}\right)^{-1}\right)^{-1} = \left(\frac{0}{\beta}\right)^{+1} = 0^1 = 0 \quad (22)$$

$$0^{-1} = \left(\left(\frac{\alpha}{0}\right)^{-1}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{0}\right)^{+1} = 0^1 = 0 \quad (23)$$

$$0^{-1} = \left(\left(\frac{0}{0}\right)^{-1}\right)^{-1} = \left(\frac{0}{0}\right)^{+1} = 0^1 = 0 \quad (24)$$

となる結果とも一致する. 即ち, (7)式の関係,

$$0^{-1} = 0$$

が一意的に成り立つと言える.

他方,  $\alpha$  及び  $\beta$  が共に 0 ではないとき,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 = \gamma^0 = 1 \quad (25)$$

が成り立つ. 従って,  $\alpha$  及び  $\beta$  が共に 0 ではないとき,  $\alpha\beta$  の逆数, 即ち,  $(\alpha\beta)^{-1}$  は, 従来の逆数と同様に,

$$\left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{\beta}\right)^0 \frac{\beta}{\alpha} = 1 \cdot \frac{\beta}{\alpha} = \frac{\beta}{\alpha} \quad (26)$$

で与えられる. これより,  $\alpha$  又は  $\beta$  の少なくとも何れか一方が 1 のとき,

$$\left(\frac{1}{\beta}\right)^{-1} = \left(\frac{1}{\beta}\right)^0 \frac{\beta}{1} = 1 \cdot \beta = \beta \quad (27)$$

$$\left(\frac{\alpha}{1}\right)^{-1} = \left(\frac{\alpha}{1}\right)^0 \frac{1}{\alpha} = 1 \cdot \frac{1}{\alpha} = \frac{1}{\alpha} \quad (28)$$

$$\left(\frac{1}{1}\right)^{-1} = \left(\frac{1}{1}\right)^0 \frac{1}{1} = 1 \cdot 1 = 1 \quad (29)$$

となる. つまり, (7), (28)式より,

$$\alpha^{-1} = \begin{cases} 0 & (\alpha = 0) \\ \frac{1}{\alpha} & (\alpha \neq 0) \end{cases} \quad (30)$$

を得る. これより, 演算として,

$$\times \alpha^{-1} = \begin{cases} \times 0 & (\alpha = 0) \\ \times \frac{1}{\alpha} & (\alpha \neq 0) \end{cases} \quad (31)$$

が成り立ち, 他方,

$$\div \alpha = \begin{cases} \times 0^{-1} = \times 0 & (\alpha = 0) \\ \times \frac{1}{\alpha} & (\alpha \neq 0) \end{cases} \quad (32)$$

が成り立つ. 従って, (31)式と(32)式から, 演算置換関係

$$\times \alpha^{-1} \Leftrightarrow \div \alpha \quad (33)$$

が成り立ち, 逆乗算と除算の置き換えが可能であることを示している (剰余形式を採らず, 商のみを考慮する場合に限られることに注意を要する.).